

二三羽 一 十二三羽

泉鏡花作

大正十三年四月

引越しをする毎に、「雀は何うしたらう。」  
もう八十幾つで、耳が遠かつた。――その耳を熟  
と澄ますやうにして、目をうつとりと空を視めて、  
火桶にちよこんと小さく居て、「雀は何うしたら  
うの。」引越しをする毎に、祖母の然う呶いたこ  
とを覚えて居る。「祖母さん、一所に越して來ま  
すよ。」當てづツばに氣安めを言ふと、「おゝ、  
然うかの。」と目皺を深く、ほく／＼と頷いた。  
其のなくなつた祖母は、いつも佛の御飯の残りだ  
の、洗ひながしのお飯粒を、小窓に載せて、雀を可  
愛がつて居たのである。

私たちの一向に氣のない事は――はれて雀の  
ものがたり――そらで嵐雪の句は知つて居ても、  
今朝も囁つた、と心に留めるほどではなかつた。が、  
少からず愛惜の念を生じたのは、おなじ麹町だが、  
土手三番町に住つた頃であつた。春も深く、やが

て梅雨も近かつた。庭に柿の老樹が一株。

遣放しに手入れをしないから、根まはり雑草の生えた飛石の上を、ちよこ／＼とよりは、ふよ／＼と雀が一羽、羽を擴げながら歩行いて居た。家内がつか／＼と跣足で下りた。いけずな女で、確に小雀を認めたらしい。チチチチ、チユ、チユツ、すぐに掌の中に入つた。「引搦んぢや 不可い、そつと／＼。」此が鶯か、かなりやだと、傳統的にも世間體にも、それ鳥籠をと、内にはないから買ひに出る處だけれど、對手が、のりを舐める代もので、お安く扱はれつけて居るのだから、臺所の目筈で其の南の縁へ先づ伏せた。――處で、生捉つて籠に入れると、一時と經たないうちに、すぐに薩摩芋を突ついたり、柿を吸つたりする、目白鳥のやうに早く人馴れをするのではない。雀の兒は容易く餌につかぬと、祖母にも聞いて知つて居たから、此のまだ草にふらついて、飛べもしない、ひよわなものを、飢ゑさしては成らない。――吃と親雀が来て餌を飼はう。それには、縁では可恐がるだらう。

で、もとの飛石の上へ伏せ直した。

母鳥は直ぐに来て飛びついた。もう先刻から庭樹

の間を、けたましく鳴きながら、彼方へ飛び、  
此方へ飛び、飛騨いでゐたのであるから。

障子を開けたまゝで覗いて居るのに、仔の可愛さ  
には、邪険な人間に對する恐怖も忘れて、目筈の周  
圍を二三尺、はらはらくるくると廻つて飛ぶ。ツゝ  
と筈の目へ嘴を入れたり、颯と引いて横に飛んだ  
り、飛びながら上へ舞立ったり。其のたびに、筈の  
中の仔雀のあこがれやうと言つたらぬ。あの聲が  
キイと聞えるばかり鳴き絶つて、引切れさうに胸毛  
を震はす。利かぬ羽を渦にして抱きつかうとするの  
は、おつかさんが、嘴を筈の目に、その  
ツゝと入れては、ツイと引く時である。

見ると、小さな餌を、蟲らしい餌を、親は嘴に  
銜へて居るのである。筈の中には、乳離れをせぬ嬰  
兒だ。火のつくやうに泣立てるのは道理である。處  
で筈の目を潜らして、口から口へ哺めるのは――  
人間の方でも其の計略だつたのだから――い  
とも容易い。

だのに、餌を見せながら鳴き叫ばせつゝ身を退い

て飛廻るのは、あまり利口でない人間にも的確に解  
せられた。「あかちゃんや、あかちゃんや、うま  
／＼をあげませう、其處を出ておいで。」と言ふ  
のである。他の手に封じられた、仔は何うして、自  
分で策が抜けられよう？ 親は何うして、自分で策  
を開けられよう？ 其の思は何うだらう。

私たちは、しみ／＼、いとしく可愛く成つたの  
である。

石も、折箱の蓋も撥飛ばして、策を開けた。

「御免よ。」「御免なさいよ。」と、雀の方よ  
り、此方が顔を見合はせて、悄氣げつゝ座敷へ引込  
んだ。

少々極が悪くつて、しばらく、背戸へ顔を出さな  
かった。

庭下駄を揃へてあるほどの所帯ではない。玄關の  
下駄を引抓んで、晩方背戸へ出て、柿の梢の一つ星  
を見ながら、「あの雀は何うしたらう。」あり  
たけの飛石　ー　と言つても一五つばかり　ー　  
を漫に渡ると、濕けた窪地で、すぐ上が葱や苔、

龍の髯の石垣の崖に成る、片隅に山吹があつて、こ  
んもりした躑躅が並んで植つて居て、垣どなりの灯  
が、ちら／＼と透くほどに二三輪咲残つた  
その茂つた葉の、蔭も深くはない低い枝に、雀が  
一羽、たよりなげに宿つて居た。正に前刻の仔に違  
ひない。  
様子が、土から僅か二尺ばかり。  
これより上へは立てないので、こゝまで連れて來た  
女親が、わりなう預けて行つたものらしい  
敢て預けて行つたと言ひたい。惡戯を詫びた私た  
ちの心を汲んだ親雀の氣の優しさよ。そ  
の親たちの塹は何處　この嬰兒ちゃんも寂  
しさうだ。

土手の松へは夜鷹が來る。築土の森では木兎が鳴  
く。  
可恐いものゝ目に觸れないやうに、成るだけ、葉の  
暗い中に隠したに違ひない。もとより藁屑も綿片も  
あるのではないが、薄月が映すともなしに、ぼつと、  
その仔雀の身に添つて、霞のやうな氣が籠つて、包  
んで圓く明かつたのは、親の情の朧氣ならず、輪光  
を顯はした影であらう。「一寸。」「何さ。」

手招きをして、「来て見なよ。」 家内を呼出して、両方から、そつと、顔を差寄せると、じつとしたのが、微に黄色な嘴を傾けた。この柔らかな胸毛の色は、さし覗いたものゝ襟よりも白かった。

夜ふかしは何、家業のやうだから、その夜はやがて明くるまで、野良猫に注意した。彼奴が後足で立てば届く、低い枝に、預つたからである。

朝寝はしたし、ものに紛れた。午の庭に、隈なき五月の日の光を浴びて、黄金の如く、銀の如く、飛石の上から、柿の幹、躑躅、山吹の上下を、二羽縦横に飛んで舞つて居る。ひら／＼、ちら／＼と羽が輝いて、三寸、五寸、一尺、二尺、草樹の影の伸びるとゝもに、親雀がつれて飛び習ふ、仔の翼は、次第に、次第に、上へ、上へ、自由に軽く成つて、卵の花垣の文を切るのが、四五度馴れると見るうちに、崖をなぞへに、上町の樹の茂りの中へ飛んで見えなく成つた。

眞綿を黄に染めたやうな、あの翼が、恚う速に

飛ぶのに馴れるか。且つ感じつゝ、私たちは飽かずに視めた。

あとで、臺所からかけて、女中部屋の北窓の小窓の小縁に、行つたり、來たり、出入りするの、五六羽、八九羽、どれが、その親と仔の二羽だかは紛れて知れない。

――二三羽、五六羽、十羽、十二三羽。こゝで雀たちの數を言つた次手に、それ／＼の道の、學者方までもない、一寸わけ知りの御人に伺ひたい事がある。

別の儀でない。雀の一家族は、おなじ場所では餘り澤山には殖えないものなのであらうか知ら？ 御存じの通り、稲塚、稲田、粟黍の實る時は、平家の大軍を走らした水鳥ほどの羽音を立てゝ、躰行き、畔行くものを驚かす、夥多しい群團を爲す。鳴子も引板も、半ば――此がための備だと思ふ。むかしのもの語にも、年月の経る間には、おなじ背戸に、孫も彦も群る筈だし、第一椋鳥と鳩を賭けて戦ふ時

の、雀の軍勢を思ひたい。よしそれは別として、長年の間には、もう些と家族が榮えようと思ふのに、十年一日と言ふが、實際、―― その土手三番町を、やがて、いまの家へ越してから十四五年になる。―― あの時、雀の親子の情に、いとしさを知つて以來、申出るほどの、さしたる御馳走でもないけれど、お飯粒の少々は毎日缺かさず撒いて置く。たとへば旅行をする時でも、  
「火の用心」  
と、「雀君を頼むよ」  
だけは、留守へ言つて置くくらゐだが、さて、何年にも、一寸來て二羽三羽、五六羽、總勢すぐつて十二三羽より數が殖えない。長者でもない癖に、俵で扶持をしないからだ、言はれゝば其までだけれど、何、私だつて、もう十羽殖えたぐらゐは、それだけ御馳走を増すつもりで居るのに。

何も、雀に託けて身代の伸びない愚痴を言ふのではない。又 別に雀の數の多く成る事ばかりを望むのではないのであるが、春に、秋に、現に目に見えて五六羽づゝは親の連れて來る子の殖えるのが分つて居るから、いつも同じほどの數なのは、



何處へ行つて、何うするのだらうと思ふからである。

が、何うも様子が、仔雀が一羽だちの出来るのを待つて、その小兒だけを宿に残して、親雀は塹をかへるらしく思はれる。

あの、仔雀が、チイノと、ありツたけ嘴を赤く開けて、クリスマスに貰つたマントのやうに小羽を動かして、胸毛をふよよと揺がせて、恚う仰向いて強請ると、あいよ、と言つた顔色で、チチツ、チツと幾度もお飯粒を嘴から含めて遣る。

食べても強請る。ふくめつゝ、後ねだりをするのを機掛に、一粒銜へて、お母さんは塹の上――

(椿の枝下で茲にお飯が置いてある) ー 其

處から、裏露地を切つて、向うの瓦屋根へフツと飛ぶ。とあとから仔雀がふはりと縋る。これで、羽を馴らすらしい。また一組は、おなじく餌を含んで、親雀が、狭い庭を、手水鉢の高さぐらゐに舞上ると、その胸のあたりへ附着くやうに仔雀が飛上る。尾を地へ着けないで、舞ひつゝ、飛びつゝ、庭中を翔廻りなどもする、矢張り羽を馴らすらしい。此の舞踏

が一齊に三組も四組もはじまる事がある。卯の花を  
搔亂し、萩の花を散らして狂ふ。 かはいゝ  
のに目がないから、春も秋も一所だが、晴の遊戯だ。  
もう些と、綺麗な窓掛、絨毯を飾つても遣りたいが、  
庭が狭いから、羽とゝもに散りこぼれる風情の花は  
澤山ない。却つて羽について来るか、嘴から落す  
か、植ゑない堇の紫 が一本咲いたり、蓼が穂を紅  
らめる。

處で、何のなかでも、親は甘いもの、仔はずるく  
甘つたれるもので。 あの胸毛の白いのが、  
見て居ると、そのうちに立派に自分で餌が拾へるや  
うになる。澄ました面で、コッソンなどゝ高慢に食べ  
て居る。いたづらものが、二三羽、親の目を抜いて  
飛んで来て、チユツチユツとつゝき合の喧嘩  
さへ遣る。生意氣にも係らず、親雀がスーッと来て  
叱るやうな顔をする、喧嘩の嘴 も、生意氣な羽  
も、忽ちぐにやゝゝに成つて、チイチイ、赤坊聲で  
甘つたれて、餌を頂戴と、口を張開いて胸毛をふ  
はゝゝとして待構へる。チチツ、チチツ、一人でお  
食べなと言つても肯かない。頬邊を横に振つても肯

かない。で、チイ／＼チイ おなか为空い  
たの。 おゝ、よち／＼、と言つた工合に、  
此の親馬鹿が、すぐにのろく成つて、お飯粒の白い  
處を ー 贅澤な奴等で、内のは挽割麥を交ぜる  
のだが餘程腹がすかないと麥の方へは嘴をつけぬ。  
此奴等、大地震の時は弱つたぞ ー 啄んで、嘴  
で、仔の口へ、押込み揉込むやうにするのが、凡そ  
堪らないと言つた形で、頬摺りをするやうに見える。

怪しからず、親に苦勞を掛ける。

その癖、他愛のないもので、陽氣がよくて、お腹が  
くちいと、うと／＼と成つて居睡をする。

さあ／＼一きり露臺へ出ようか、で、塀の上  
から、揃つてもの干へ出たとお思ひなさい。日のほ  
か／＼と一面に當る中に、聲は噪ぎ、影は踊る。

すてきに物干が賑 だから、密と寄つて、隅の本  
箱の横、二階裏の肱掛窓から、まぶしい目をぱちく  
りと遣つて覗くと、柱からも、横木からも、頭の上  
の小廂からも、暖な影を湧かし、羽を光らして、一  
齋に。パツと逃げた。 ー ー 飛ぶのは早い、裏邸

の大枇杷の樹までさしわたし五十間ばかりを瞬く間もない。――（此の枇杷の樹が、馴染の一家族の埒なので、前通りの五本ばかりの櫻の樹（有島家）にも一群衆を食つて居るのであるが、その組は私の内へは来ないらしい、持場が違ふと見える）――時に、女中がいけぞんざいに、取込む時引外したまゝの掛棹が、斜違ひに落ちて居た。硝子一重すく鼻の前に、一羽可愛いのが眞正面に、ぽかんと留まつて残つて居る。――どうかして、座敷へ飛込んで戸惑ひするのを掴へると、掌で暴れるから、此のくらゐ、しみ／＼と雀の顔を見た事はない。ふつくりとも、ほつかりとも、細い毛へ一つづつ日光を吸込むんで、おゝ、お前さんは飴で出来て居るのではないかい、と言ひたいほど、とろんとして、目を眠つて居る。道理こそ、人の目と、其の嘴と打撞りさうなのに驚きもしない、と見るうちに、蹈へて留つた小さな脚がひよいと片脚、幾度も下へ離れて迂りかゝると、その時はビクリと居直る。

煩つて動けないか、怪我をして居ないかな。

以前、あしかけ四年ばかり、相州逗子に住つた時  
(三太郎) と名づけて目白鳥が居た。

櫻山に生れたのを、をとりで捕つた人に貰つたのであつた。が、何處の巢に居て覺えたらう、鶉、駒鳥、あの邊にはよく居る頬白、何でも囀る

ほうほけきよ、ほけきよ、ほけきよ、明かに鶯の聲を鳴いた。目白鳥としては駄鳥か何うかは知らないが、私には大の、ご祕藏——長屋の破軒に、水を飲ませて、芋で飼つたのだから、笑つて故と

(ご)の字をつけておく——またよく馴れて、殿様が鷹を据ゑた格で、掌に置いて、それと見せると、パツと飛んで蟲を退治た。また、冬の日のわびしさに、紅椿の花を炬燵へ乗せて、籠を開けると、花を被つて、蜜を吸ひつゝ、嘴を眞黄色にして、掛蒲團の上を押廻つた。三味線を弾いて聞かせると、音に競つて軒で高囀りする。寂しい日に客が来て話をし出すと障子の外で負けまじと鳴きしきる。可愛いもので。可愛いにつけて、斷じて籠には置くまい。秋雨のしよぼ／＼と降るさみしい日、無事なやうにと願ひ申して、岩殿寺の観音の山へ放した時は、煩つて居た家内と二人、悄然として、ツ

イーツイーと梢を低く坂下りに樹を傳つて慕ひ寄る  
聲を聞いて、ほろりとして、一人は袖を濡らして歸  
つた。が、――其の目白鳥の事だ。

（寒い風だよ、ちよぼ一風は、しはりごはりと吹い  
て来る）と田越村一番の若衆が、泣聲を立てる、大  
根の煮える、富士おろし、西北風の烈しい夕暮に、  
いそがしいのと、寒いのに、向うみずに、がたりと、  
門の戸をしめた勢で、軒に釣つた鳥籠をぐわたり、  
ボタンと撥返した。アツと思ふと、中の目白鳥は、  
羽ばたきもせず、横木を轉げて、落葉の挟つたやう  
に落ちて縮んで居る。「しまった、  
三  
太郎が目をまはした。「まあ、大變ね。」と  
襷掛けのまゝ庖丁を、投げ出して、目白鳥を掌に  
取つて据ゑた婦は目に一杯涙を溜めて、「何うしま  
せう。」其、其の時だ。試に手水鉢の水を柄杓  
で切つて雫にして、露にして、目白鳥の嘴を開けて  
含まして、襟をあけて、膚につけて暖めて、しばらく  
くすると、ひく／＼と動き出した。あゝ助りました、  
御利益と、岩殿の方へ籠を開いて、中へ入れると、  
あはれや、横木へつかまり得ない。おつこちるのが  
可恐いのか、隅の、隅の、狭い處で小さく成つた。あ

くる日一日は、些と、ご惱氣と言つた形で、摺餌に  
嘴のあとを、ほんの筋はどつけたばかり。但し完全  
に蘇生つた。

此の経験がある。

水でも飲まして遣りたいと、障子を開けると、其  
の音に、怪我處か、わんばくに、しかも二つばかり  
廻つて飛んだ。仔雀は、うとり／＼と居陸をして居  
たのであつた。憎くない。

尤もなか／＼の悪戯もので、逗子の三太郎

其の目白鳥　ー　がお茶の子だから雀の口眞

似をした所爲でもあるまいが、日向の縁に出して人  
の居ない時は、籠のまはりが雀どもの足跡だらけ。

秋晴の或日、裏庭の茅葺小屋の風呂の廂へ、向うへ  
櫻山を見せて掛けて置くと、午少し前の、いゝ天氣  
で、閑な折から、雀が一羽、丁ど目白鳥

の上の廂合の樋竹の中へすぼりと入つて、ちよつと  
黒い頭だけ出して、上から籠を覗込む。嘴に小さな  
芋蟲を一つ銜へ、あつち向いて、こつち向いて、ひ  
よい／＼と見せびらかすと、籠の中のは、戀人から

来た玉章はどに欲しがつて駈上り飛上つて取らうとすると、ひよいと面を横にして、また、ちよい／＼と見せびらかす。いや、いけずなお轉婆で。

處がはずみに掛つて振つた拍子に、その芋蟲をポタリと籠の目へ、落したから可笑い。目白鳥は澄まして、ペロリと退治た。吃驚仰天した顔をしたが、ぼんと樋の口を突出されたやうに飛んだもの。

瓢箪に宿る山雀、と言ふ謡がある。雀は樋の中がすきらしい。五六羽、また、七八羽、横にずらりと並んで、顔を出して居るのが常である。

或殿が領分 巡回の途中、菊の咲いた百姓家に床凡を据ゑると、背戸畑の梅の枝に、大な瓢箪が釣してある。梅見と言ふ時節でない。

「これよ、あの、瓢箪は何に致すのぢやな。」

その農家の親仁が、

「へい／＼、山雀の宿にござります。」

「あゝ、風情なものぢやの。」



能のうの狂言きやうげんの小舞こまひの謠うたひに、

いたいけしたるものあり。張子はりこの顔かほや、練稚ねりち  
兒こ。しゆくしや結びむすに、さゝ結びむす、やましな結びむすに  
風車かざぐるま。瓢箪へうたんに宿やどる山雀やまがら、胡桃くるみにふける友鳥ともどり

「いまはじめて相分あひわかつた。――些少ちとぢやが餌えの  
料れうを取とらせよう。」

小春こはるの麗うらひかな話はなしがある。

御前ごぜんのお目めにとまつた、謠うたひのまゝの山雀やまがらは、瓢箪へうたん  
を宿やどとする。此方人等こちとらの雀すずめは、棟割長屋むねわりながやで、樋竹とひだけの  
相借家あひじやくやだ。

腹はらが空すくと、電信でんしんの針はりがねに一座いざずらりと出でて、  
ぼち／＼ぼちと中空なかぞらたか高く順じゆんに並ならぶ。中なかでも音頭取おんどとりが、  
電柱でんちゆうの頂邊ていぺんに一羽留はとまつて、チイと鳴なく。これを合圖あひづ  
に、一齊ひとまにチイと鳴な出す。――塀へいと枇杷びはの樹きの間あひだ  
に當あたつて。で御飯ごはんをくると、催促さいそくをするのである。

私が即ち取次いで、「催促てるよ、／＼。」

「せはしないのね。 煩いよ。」

などと言ひながら、茶碗に装つて、婦たちは露地へ廻る。此が此のうへ後れると、勇悍なのが一羽押寄せる。馬に乗つた勢で、小庭を縁側へ飛上つて、ちよん、ちよん、ちよん／＼と、雀あるきに扉を抜けて臺所へ入つて、お竈の前を廻るかと思ふと、上の引窓へパツと飛ぶ。

「些と自分でもお働き、蟲を取るんだよ。」

何も、肯分けるのでもあるまいが、言の下に、萩の小枝を、花の中へすら／＼、葉の上はさら／＼

あの撓々とした細い枝へ、堀の上、椿の樹からトンと下りると、下りたなりにすつと、近づいて、一寸末を餘して垂下る。すぐに、くるりと腹を見せて、葉裏を潜つてひよいと攀ぢると、また一羽が、おなじやうに堀の上からトンと下りる。下りると、すつと枝に繞つて、ぶら下るかと思ふと、翩然と傳ふ。又一羽が待兼ねてトンと下りる。一株の萩を、五六羽で、ゆさ／＼揺つて、盛の時は花もこぼさず、嘴で銜へたり、尾で跳ねたり、横顔で覗いたり、恚

くして、裏おもて、蟲を漁りつゝ、滑稽けてはずんで、ストーンと落ちるかとする、羽をひら／＼と宙へ踊つて、小枝の尖へひよいと乗る。

水上さんが此を聞いて、莞爾して勧めた。

「鞆鞭を拵へてお遣なさい。」

邸の庭が廣いから、直ぐにこゝへ氣がついた。私たちは思ひも寄らなかつた。絲で杉箒を結へて、其の萩の枝に釣つた。此の趣を乗氣で饒

舌ると、雀の興行をするやうだから見合はせる。が、鞆鞭に乗つて、瓢箪ぶつくりこ、なぞは何でもない。時とすると、塀の上に、いま睦じく二羽啄んで居たと思ふ。その一羽が、忽然として姿を隠す。飛びもしないのに、おや／＼と人間の目にも隠れるのを、恣う搜すと、いま居た塀の笠木の、すぐ裏へ、頭を揉込むやうにして縦に附着いて居るのである。脚が／＼りもないのに巧なもので。――然うすると、見失つた友の一羽が、怪訝な様子で、チ／＼と鳴き／＼、其處らを覗くが、その笠木の一寸した出張りの咽に、頭が附着いて居るのだから、どつち

を覗<sup>のぞ</sup>いても、上<sup>うへ</sup>からでは目に附<sup>つ</sup>かない。チチツ、チツと少<sup>しば</sup>時<sup>じ</sup>搜<sup>さが</sup>して、パツと枇杷<sup>びは</sup>の樹<sup>き</sup>へ飛<sup>と</sup>んで歸<sup>かへ</sup>ると、そのあとで、密<sup>そつ</sup>と頭<sup>あたま</sup>を半<sup>はん</sup>分<sup>ぶん</sup>出<sup>だ</sup>してきよる／＼と見<sup>み</sup>ながら、嬉<sup>うれ</sup>しさうに、羽<sup>はね</sup>を揺<sup>ゆ</sup>つて後<sup>あと</sup>から颯<sup>さつ</sup>と飛<sup>と</sup>んで行く。惟<sup>おも</sup>ふに、人<sup>ひと</sup>の子<sup>こ</sup>のするかくれんぼである。

さて、恚<sup>か</sup>うたわいもない事<sup>こと</sup>を言<sup>い</sup>つて居<sup>あ</sup>るうちに  
ー 前<sup>さつ</sup>刻<sup>き</sup>言<sup>い</sup>つた ー 仔<sup>こ</sup>どもが育<sup>そだ</sup>つて、ひとりだち、ひとり遊<sup>あそ</sup>びが出来るやうに成<sup>な</sup>ると、胸<sup>むな</sup>毛<sup>げ</sup>の白<sup>しろ</sup>いのばかりを殘<sup>のこ</sup>して、親<sup>おや</sup>雀<sup>すずめ</sup>は何<sup>ど</sup>處<sup>こ</sup>へ飛<sup>と</sup>ぶのか居<sup>あ</sup>なく成<sup>な</sup>る。數<sup>かず</sup>は増<sup>ま</sup>しもせず、減<sup>へ</sup>りもせず、同<sup>おな</sup>じく十五六羽<sup>は</sup>どまりで、そのうちには、芽<sup>め</sup>が葉<sup>は</sup>になり、葉<sup>は</sup>が花<sup>はな</sup>に、花<sup>はな</sup>が實<sup>み</sup>に成<sup>な</sup>り、雀<sup>すずめ</sup>の咽<sup>のど</sup>が黒<sup>くろ</sup>く成<sup>な</sup>る。年<sup>ねん</sup>々<sup>々</sup>三度<sup>ど</sup>をんなじなのである。

妙<sup>めう</sup>な事<sup>こと</sup>は、いま言<sup>い</sup>つた、萩<sup>はぎ</sup>また椿<sup>つばき</sup>、朝<sup>あさ</sup>顔<sup>がほ</sup>の花<sup>はな</sup>、露<sup>つゆ</sup>草<sup>くさ</sup>などは、枝<sup>えだ</sup>にも蔓<sup>つる</sup>にも馴<sup>な</sup>れ馴<sup>な</sup>染<sup>なじ</sup>んで居<sup>あ</sup>るらしい と言<sup>い</sup>ふよりは、親<sup>おや</sup>雀<sup>すずめ</sup>から教<sup>をし</sup>へられて居<sup>あ</sup>るらしい。ー が、見<sup>み</sup>馴<sup>な</sup>れぬものが少<sup>すこ</sup>しでもあると、可<sup>こ</sup>恐<sup>おそ</sup>がつて近<sup>ちか</sup>づかぬ。一<sup>いち</sup>日<sup>にち</sup>でも二<sup>に</sup>日<sup>にち</sup>でも

遠くの方へ退いて居る。尤も、時には此方から、故  
とおと ほうの へ ちがいて いる。 尤も、 時には 此方から、 故  
とおいでの儀を御免蒙る事がある。物干へ蒲團を干  
す時である。

お嬢さん、お坊ちゃんたち、一家揃つて、いゝ心  
持に成つて、ふつくりと、蒲團に團樂を試みるのだ  
から堪らない。ぼと／＼と、あとが、ふんだらけ。  
此には弱る。其處で工夫をして、他所から頂戴して  
貯へて居る豹の皮を釣つて置く。と枇杷の宿に居す  
くまつて、裏屋根へ來るのさへ、おつかなびつくり、  
(坊主びつくり貂の皮) だから面白い。

が、一夏縁日で、月見草を買つて來て、萩の傍へ  
植ゑた事がある。夕月に、あの花が露を香はせては  
ツと咲くと、いつも此の黄昏には、一時留り餌に騒  
ぐのに、ひそまり返つて一羽だつて飛んで來ない。  
はじめは怪しんだが、二日め三日めには心着いた。  
意氣地なし、臆病。烏瓜、夕顔などは分けても知己  
だらうのに、はじめて咲いた月見草の黄色な花が可  
恐いらしい  
可哀相だから植替へようかと、  
言ふうちに、四日めの夕暮頃から、漸つと出て來た。

何、一度味をしめると飛ついて露も吸ひかねぬ。

まだある。土手三番町の事を言つた時、卯の花垣をなど、少々調子に乗つたやうだけれど、まつたく其の庭に咲いて居た。土地では珍しいから、引越す時一枝折つて来てさし芽にしたのが、次第に丈たかく生立ちはしたが、葉ばかり茂つて、蕾を持たない。丁ど十年目に、一昨年の卯月の末にはじめて咲いた、それも塀を高く越した日當のいゝ一枝だけ眞白に咲くと、其の朝から雀がバツタリ。意氣地なし。また丁ど其の卯の花の枝の下に御飯が乗つて居る。前年の月見草で心得て、此の時は澄まして居た。やがて一羽づゝ密と來た。忽ち卯の花に遊ぶこと萩に戯るゝが如しである。花の白いのにさへ怯えるのであるから、雪の降つた朝の臆病 思ふべしで、枇杷塚と言ひたい、むかうの眞白の木の丘に埋れて、聲さへ立てないで可哀である。

椿の葉を拂つても、飛石の上を搔分けても、物干に雪の溶けかゝつた處へ餌を見せても影を見せない。炎天、日盛の電車道には、焦げるやうな砂を浴びて、

螻蛄の斧と言つた強いのが普通だのに、此はどうしたものであらう。はじめ、こゝへ引越したてに、一二年居た雀は、雲なんぞは驚かなかつた。山を兎が飛ぶやうに、雪を蓑にして、吹雪を散らして翔けたものを――

こゝで思ふ。其の兒、その孫、二代三代に到つて、次第おくり、追續きに、おなじ血筋ながら、いつか、黄色な花、白い花、雪などに對する、親雀の申しふくめが消えるのであらうと思ふ。

泰西の諸國にて、その公園に群る雀は、パンに馴れて、人の掌にも帽子にも遊ぶと聞く。何故に、わが背戸の雀は、見馴れない花の色をさへ恐るゝのであらう。實に花なればこそ、些とでも變つた人間の顔には、渠等は大なる用心をしなければならぬ。不意の礫の戸に當る事幾度ぞ。思ひも寄らぬ蜜柑の皮、梨の核の、雨落、鉢前に飛ぶのは數々である。

牛乳屋が露地へ入れば驚き、酒屋の小僧が「今

日は「を叫べば逃げ、大工が来たと見ればすくみ、屋根屋が来ればひそみ、疊屋が来ても寄りつかない。

いつかは、何かの新聞で、東海道の何某は雀うち  
の老手である。並木づたひに御油から赤坂まで行く  
間に、雀の獲もの約一千を下らないと言ふのを見て  
戦慄した。

空気銃を取つて、日曜の朝、こゝの露地口に立つ、  
狩獵服の若い紳士たちは、失禮ながら、犬ころしに  
見える。

去年の暮にも、鄰家の少年が空気銃を求め得て高  
く捧げて歩いた。鄰家の少年では防ぎ難い。おつ  
かひものは、たゞ煎餅の袋だけでも、雀のために、  
うちの小母さんが折入つて頼んだ。

親たちが笑つて、  
「お宅の雀を狙へば、銃を没収すると言ふ約條ず  
みです。」

嘗て、北越、俱利伽羅を汽車で通つた時、峠の驛  
の屋根に、車のとどろくにも驚かず、雀の日光に浴



しつゝ、屋根を自在に、樋の宿に出入りするのを見て、谷に咲残った撫子にも、火牛の修羅の巷を忘れた。――古戦場を忘れたのが可いのではない、忘れさせたのが雀なのである。

モウバツサンが普佛戦争を題材にした一篇の読みだしは、「巴里は包圍されて饑餓つゝ悶えて居る。屋根の上に雀も少くなり、下水の埃も少くなつた。」と言ふのではなかつたか。

雪の時は――見馴れぬ花の、それとは違つて、天地を包む雪であるから、もし此に恐れたと成ると、雀のためには、大地震以上の天變である。東京のは早く消えるから可いものの、五日十日積るのには何うするだらう。半歳に埋もるゝ國もある。

或時も、また雪のために一日形を見せないから、眞個の事だが案じて居ると、次の朝の事である。ツイーと寂しさうに鳴いて、目白鳥が唯一羽、雪を被いで、紅に咲いた一輪、寒椿の花に來て、ちら／＼と羽も尾も白くしながら枝を僭つ

た。

炬燵から見て居ると、しばらくすると、雀が一羽、パツと来て、おなじ枝に、花の上下を、一所に廻つた。續いて三羽五羽、一齊に皆來た。御飯はすぐ嘴の下にある。パツパ、チイノ、諸きほひに歡喜の聲を上げて、踊りながら、飛びながら、啄むと、今度は目白鳥が中へ交つた。雀同志は、突合つて、先を争つて狂つても、その目白鳥にはおとなしく優しかつた。そして目白鳥は、欲しさうに、不思議さうに、雀の飯を視めて居た。

私は何故か涙ぐんだ。

優しい目白鳥は、花の蜜に恵まれよう。――親のない雀は、うつくしく愛らしい小鳥に、教へられ、導かれて、雪の不安を忘れたのである。

それにつけても、親雀は何處へ行く。――

―― 去年七月の末であつた。

餘り暑

いので、愚に返つて、恚う何うも、おゝ暑いでめげ

ては不可い。小兒の時は、目盛に蜻蛉を釣つたと、  
炎天に打つかる氣で、そのまゝ日盛を散歩した。

その氣の次手に、何となく、其處等屋敷町の垣根を探して（ごん／＼ごま）が見たかつたのである。此の名からして小兒で可い。――私は大好きだ。スゞメノエンドウ、スゞメウリ、スゞメノヒエ、姫百合、姫萩、姫紫苑、姫菊の臈たけた稱に對して、スゞメの名のつく一列の雜草の中に、此のごん／＼ごまを、私はひそかに「スゞメの蠟燭」と稱して、内々鼻屑で居る。

分けて、孟蘭盆のその月は、墓詣の田舎道、寺つゞきの草垣に、線香を片手に、此のスゞメの蠟燭、ごん／＼ごまを摘んだ思出の可懐さがある。

然も其の癖、卑怯にも片陰を拾ひ／＼小さな社の境内だの、心當の邸の垣根を覗いたが、前年の生垣も煉瓦にかはつたのが多い。――清水谷の奥まで掃除が届く。――梅雨の頃は、闇黒に月の影がさしたほど、彼方此方に目に着いた紫陽花も、此の二

三年ねんこつち最もう少すくない。――荷車にぐるまのあとには芽めぐんでも、自動車じどうしゃの轍わだちの下したには生はえまいから、いまは車おん前草まへくささへ直すぐには見みようたつて間に合あはない。

で、何處どこでも、あの、珊瑚さんごを木み乃伊いにしたやうな、ごん／＼ごまは見當みあたらなかつた。――ないものねだりで、尚なほ欲ほい、歩あ行くうちに汗あせを流ながした。

場所ばしょは言いふまい。が、向むかうに森もりが見みえて、樹きの茂しげつた坂さかがある。私わたしが覺おぼえてからも、むかし道中だうちゆうの茶屋旅籠ちやゝはたこのやうな、中庭なかにを行ゆきぬへ腰こしを掛かけさせる天麩羅茶漬てんぷらちやつけの店みせがあつた。――その坂さかを下おりかゝる片側かたがはに、坂さかなりに落おち込んだ空溝からみぞの廣ひろいのがあつて、道みちには破朽やぶれくちた柵さくが結ゆつてある。其その空溝からみぞを隔へたてた、律むくろを其そのまゝ斜はすか違ちがひに下おりる藪垣やぶがきを、むかう裏うらから這はつて、茂しげつて、またたとへば、瑪瑙めなうで刻きざんだ、さゝ蟹かにのやうなスゞメの蝋燭ろうそくが見みつかつた。

つかまへて支さへて、乗出のりだしても、溝みぞに隔へたてられて手が届とかなかつた。

ステッキ  
杖の柄で搔寄せようとするが、迂る。――がさ  
／＼と遣つて居ると、目の下の枝折戸から――  
こんな處に出入口があつたかと思ふ――  
扉を明けて、圓々と肥つた、でつぶり漢が仰向いて  
出た。きびらの洗ひざらし、漆紋の兀げたのを被た  
が、肥つて大いから、手足も腹もぬつと露出て、ち  
やん／＼を被つたやうに見える、逞ましい肥大漢の  
柄に似合はず、おだやかな、柔和な聲して、  
「何か、おとしものでもなされたか、拾つてあげ  
ませうかな。」

と言つた。四十ぐらゐの年配である。

私は一應挨拶をして、わけを言はなければ成らな  
かつた。

「はゝあ、ごん／＼ごま、お薬用か、

何か禁厭にでもなりますので？」

とに角、路傍だし、埃がして居る。裏の崖境には、  
清浄なのが澤山あるから、御休息かた／＼。で、も  
のゝ言ひぶりと人のいゝ顔色が、氣も隔かせなけれ  
ば、遠慮もさせなかつた。

「丁ど午睡時、徒然で居ります。」

導みちびかるゝまゝ、折戸をりどを入はると、そんなに廣ひろいと言いふではないが、谷間たにまの一軒家けんやと言いつた形かたちで、三方ぼうが高臺たかだいの森もり、林はやしに包つまれた、ゆつくりした荒あれた庭にはで、むかうに座敷ざしきの、縁えんが涼すずしく、油蝉あぶらげみの中なかに閑寂しじかに見みえた。私わたしは一寸ちよつと其處そこへ掛かけて、會釋あひやくで濟すますつもりだつたが、古疊ふるたゝみで暑あつくなるしい、せめてのおもてなしと、竹たけのづんど切きりの花活はないけを持もつて、庭にはへ出直でなほすと臺だいど所ころの前まへあたり、井戸いどがあつて、撥釣瓶はねつるべの、釣瓶つるべが、虚空こくうへ飛とんで猿さるのやうに撥ねて居いた。傍かたはらに青芒あをすゝきが一叢ひとむら生あひしげ茂り、桔梗ききやうの早咲はやさきの花はなが二三輪りん、たゞ初々つひ／＼しく咲さいたのを、荅つばみと一枝ひとえだ、三筋すぢばかり青芒あをすゝきを取添とりそへて、竹筒たけづゝに插さして、のつしりとした腰こしつきで、井戸いどから撥釣瓶はねつるべでざぶりと汲く上げ、片手かたての水差みづさしに汲くんで、桔梗ききやうに灌そいで、胸むねはだかりに提さげた處ところは、腹はらまで毛けだらけだつたが、床とこへ据すゑて、圓まるい手てで、枝えだぶりを一寸ちよつと撓ためた形かたちは、悠揚いいうやうとして、そして輕かるい手際てぎはで、きちんと極きまつた。掛物かけものも何なにも見みえぬ。が、唯たゞその桔きき梗やうの一輪りんが紫むむらさきの星ほしの照てらすやうに据すわつたのである。此この待遇たいぐうのために、私わたしは、縁えんを座敷ざしきへ進すすまなければならなかつた。

「麿茶を一つ獻じませう。何事も御覽の通りの侘住居で。あの、茶道具を、これへな。」

と言ふと、次の間の――崖の草のすぐ覗く

――竹簀子の濡縁に、むかうむきに端居して

いま私の入つた時、一度ていねいに、お時

誼をしたまゝ、うしろ姿で、ちらりと赤い小さなも

の、年紀ごろで見て勿論お手玉ではない、糠袋か何

ぞせつせと縫つて居た。島田鬚の艶々し

い、きやしやな、色白な女が立つて手傳つて、――

肥大漢と二人して、やがて昆爐を縁側へ。

焚つけを入れて、炭を繼いで、土瓶を掛けて、

茶盆を並べて、それから、扇子ではた／＼と昆爐の

火口を煽ぎはじめた。

「あれに澤山ございます、あの、茂りました處

に。」

「瀧でも落ちさうな崖です――こんな町中に、

あらうとは思はれません。御閑静で實に結構です。

霧が湧いたやうに見えますのは。」

「烏瓜でございます。下闇で暗がりでありますか

ら、日中から、一杯咲きます。――あすこは、い

くらでも、ごん／＼ごまがございますでな。貴方は  
何とかおつしやいましたな、スゞメの蠟燭。」「

これよりして、私は、茶の煮える間と言ふもの、  
およそ此の編に記した雀の可愛さを爰で話したので  
ある。時々微笑んでは振向いて聞く。娘か、若い妻  
か、或は妾か。世に美しい女の状に、一つはうか  
／＼誘はれて、氣の發奮んだ事は言ふまでもない。

さて幾度か、茶をかへた。

「これを御縁に。」「

「勿論かさねまして、頃日に。――では、失

禮。」「

「あゝ、しばらく。これは、貴方、お

めしものが。」「

心着くと、おめしものも氣恥しい、浴衣  
だが、うしろの縫めが、しかも、したゝか綻びて居  
たのである。

「こゝもとは茅屋でも、田舎道ではありませんぢ  
や。尻端折 飛んでもない。」



あゝ、あんた、一寸繕つておあげ申せ。」

「はい。」

すぐに美人が、手の針は、まつげにこぼれて、目に見えぬが、糸は優しく、皓齒にスツと含まれた。

「あなた

」

「あゝ、これ、紅い糸で縫へるものかな。」

「あれ　　おほゝゝ。」

私がつそりと突立つた裾へ、女の背筋が絡つたやうに成つて、右に左に、肩を曲ると、居勝手が悪く、白い指がちら／＼亂れる。

「恐縮です、何とも何うも。」

「恠う三人と言ふもの附着いたのでは、第一私が此の肥體ぢや。お暑さが堪らんわい。衣服をお脱ぎなさつて。　　ささ、それが早い。　　御

遠慮があつては成らぬ　　ー　　が、お身に合ひさうな着替はなしぢや。　　これは、一つ、亭主

が素裸に相成りませう。それならばお心安い。」

きびらを剥いで、すつぱりと脱ぎ放した。畚褌

の肥大裸體で、

「それ、貴方。お脱ぎなすつて。」

と毛むくじやらの大胡坐を搔く。

呆氣に取られて立すくむと、

「おゝ、これ、あんた、あんたも衣ものを脱ぎな

さい。みな裸體ぢや。然うすればお客人の遠慮がな

う成る。はゝはゝゝ、それが何より。さ、

脱ぎなさい／＼。」

串戯にしてもと、私は吃驚して、言も出ぬのに、

女はすぐに幅狭な帯を解いた。膝へ手繰ると、袖を

両方へ引落して、雪を分けるやうに、するりと脱ぐ。

膚は蔽うたよりふつくりと肉を置いて、

背筋をすんなりと、撫肩して、白い脇を乳が覗いた。

それでも、脱ぎかけた浴衣を尚ほ膝に半ば挟んだの

を、おつ、と這ふと、あれ、と言ふ間に、亭主がず

る／＼と引いて取つた。

「はゝゝは。」と笑ひながら。既にして、朱

鷲色の布一重である。

私も脱いだ。汗は垂々と落ちた。が、憚りながら  
禪は白い。一輪の桔梗の紫の影に映えて、女は  
うるほへる玉のやうであつた。

その手が絲を曳いて、針をあやつつたのである。

縫へると、帯をしめると、私は胸を折るやうにし  
て、前のめりに木戸口へ駈出した。挨拶は済ました  
が、咄嗟のその早さに、でつぶり漢と女は、衣を引  
掛ける間もなかつたらう。あの裸體のまゝ、  
井戸の前を、青すゝきに、白く摺れて、人の姿の怪  
しい蝶に似て、すつと出た。

その光景は、地獄か、極樂か、覺束ない。

「あなた 雀さんに、よろしく。」

と女が莞爾して言った。

坂を駈上つて、はつと呼吸を吐いた。が、しばらく  
く茫然としてゐんだ。――電車の音はあとさきに  
聞えながら、方角が分らなかつた。直下の炎天に目  
さへくらむばかりだつたのである。

時に――目の下の森につままれた谷の中から、

一セイして、高らかに簫の笛が雲の峯に響いた。

話の中に、稽古の弟子も歸つたと言つた。――あの主人は、簫を吹くのであるか。

然ういへば、餘りと言へば見馴れない風俗だから、見た目をさへ疑ふけれども、肥大漢は、はじめから、裸體に成つてまで、烏帽子のやうなものをチヨンと頭にのせて居た。

「奇人だ。」

「いや、崖下のあの谷には、魔窟があ

ると言ふ。その種々の意味で。

何しろ十年ばかり前には、暴風雨に崖くづれがあつて、大分、人が死んだ處だから。――と或友だちは私に言つた。

炎暑、極熱のための疲勞には、みめよき女房の面が赤馬の顔に見えたと言ふ、むかし武士の話がある。霜が枝に咲くやうに、汗――が幻を

描いたのかも知れない。が、何故か、私は、

實を言へば、雀の宿にともなはれたやうな思ひ

がするのである。

かさねてと思ふ、日をかさねて一月にたらず、九月一日のあの大地震であつた。

「雀たちは

雀たちは

火を避けて野宿しつゝ、炎の中に飛ぶ炎の、小鳥の形を、眞夜半かけて案じたが、家に歸ると、轉げ落ちたまゝ底に水を殘して、南天の根に、ひゞも入らずに残つた手水鉢のふちに、一羽、ちよんと傳つて居て、顔を見て、チイと鳴いた。

後に、密と、谷の家を覗きに行つた。近づく胸は轟いた。が、たゞ焼原であつた。

私は夢かとも思ふ。いや、雀の宿の氣がする。

あの大漢のまる顔に、口許のちよぼんとしたのを思へ。卵の毛で胡粉を刷いたやうな女の膚の、どこか、頤の下あたりに、黒いあざはなかつたか、

うつむいた島田鬚の影のやうに――

をかした事は、その時摘んで来たごん／＼ごまは、いつ何うしたか定かには覺えないのに、秋雨の草に

生<sup>は</sup>えて、  
塀<sup>へい</sup>を傳<sup>つた</sup>つて居<sup>ゐ</sup>たのである。

【完】